



現代の英雄

ヴァスコ・ダ・ガマの生涯

大久保昭男 著
三才書房

ヴァスコ・プラトリーニ

現代の英雄

一書房版

大久保 昭男
おおくほ しょうお

1927年 茨城県に生まれる。

専 攻 イタリアおよびフランス文学・
新日本文学会会員。

著訳書 『喜びは死を超えて』『七人の息
子たち』(以上弘文堂),『ソビエ
ト印象旅行』(三一新書)その他

現住所 神奈川県川崎市小田町 2-68

現代の英雄 著者／ヴァスコ・プラトリ
ーニ 訳者／大久保昭男 1962年10月10
日／第一版発行 発行所／株式会社三一
書房（東京都千代田区神田駿河台2の9）
印刷所／株式会社三陽社 製本所／橋本
製本所 ©1962年発行者 定価／380 円

現代の英雄

ある読者たちはおそらく、ペチョーリンの性格についての私の意見を知りたいと思うに違いない……私の答はこの本の題名である。

レールモントフ『現代の英雄』

第一部

第一章

テラッスには、下着類を干すための紐が何本も、女たちの手で張られていた。壁ぎわにヴィルジニアの鶏小屋があり、その屋根はトタン板、囲いは網でできていた。手摺りのきわには小さい仕切りが設けられ、そこにフアリエーロのトマトが植えられていた。台所はかなり広く、女たちがめいめいの焔炉と、炊事道具や食料をのせるテーブル一つとおくことができた。この住人は、戦争で家を失くした人びとか、はじめから家をもたない人びとだった。二階の三つの部屋に三つの家族が住んでいたが、周囲の人びとはこれらの家族を羨んだ。それは第一に、このアバルトマンにはテラッスが附いているからであり、またこれらの家族が少人数で落ちついて暮しているからであった。もっとも、このなかの第三番目の家族は正確には家族と呼ぶには

ふさわしくなかった。何故なら、その住人はたった一人だったからである。その人物について話すとき、人びとは「鶏小屋の奥さん」とか「フアッジョ夫人」とか呼んだ。ヴィルジニアが寡婦であることと、その夫がバルチザンに銃殺されたということ以外には、彼女について人びとは何も知らなかった。彼女は一人で、ひっそりと暮していた。見るからに悲しげなその風情は人びとの空想をかきたてた。背が高く、髪はブロンドで、胸が豊かで、明るい眼をしていた。彼女を、男たちは美人だと言ひ、女たちはお高いと言った。

彼女は農村の生まれで実家は小地主だった。十五年ほど前（彼女は現在三十三歳である）、その実家の前を流れている河に新しい橋を架ける工事がおこなわれた。この工事の監督をしていたのは、背が高く、こめかみが白く、身のこなしの軽快な四十歳ばかりの技師であった。彼はヴィルジニアを見かけると、すぐに申し入れて妻にもらいうけた。技師は新妻に、庭と浴室のついた家を市中にあてがった。彼女は、夫の情愛と夫への服従との中で日を過ごし、家の手入れに気をくぼり、子供が生まれるのを楽しみに待っていた。ところが、子供は生まれずに、戦争がやってきた。彼女の夫はもう若くなかったので、兵隊には行かなか

った。彼女は幸せだった。敵軍が彼女の故郷の村を爆撃して、河にかかっていた橋をこわし、その両親を殺してしまふ日まで、彼女は幸せだった。この日彼女は喪服をつけた。喪服と同じく、心の悲嘆もなぐつづいた。ファシズムが倒れ、すぐまた復活した時に、彼女の夫はすっかり変っていた。彼女には、このことをどう考えていいのか、まるでわからなかった。夫のなにもかも、声までも変ってしまった。彼は毎日家を留守にするようになり、服装をファシスト風に変えた。(夫はもう土木技師をやめてしまったのかしら?)結婚以来十年のあいだに、夫について不審を抱くなど、ついぞなかったヴィルジニアだった。ある晩、夫は帰宅しなかった。翌日、市中で戦闘が開始された。彼女が夫を見つけたのは、死亡者安置台の上だった。誰か他人の衣服でつまれ、顔は無残にくづれていた。まもなく、彼女はその家を去らなければならなくなった。又借り現在の部屋を彼女にあてがったのは、彼女の元の家に入りこんできた人びとだった。現在の住いは元の家とは反対の方角の外れにあり、まったく別な世界だった。

六ヵ月が流れたが、ヴィルジニアは、その懺悔聴聞僧に話したようにあいかわらず《夢の中で》生きている思いだった。思いを一つことに集中することができなくなっ

まっていた。他愛のない欲求にかられることが多くなり、そのなかでも一ばん激しいのは、映画に行きたいという気持だった。もとの家からは、寢室の調度類と鶏の一部とをかうりじて救い出すことができた。彼女にとっては、掠奪からこれだけでも救い出すのは容易なことではなかった。両の腕に二羽の鶏を抱いて新しい住居にやってきた時に、ヴィルジニアは人びとの哄笑と喝采に迎えられた。

「喪中なのよ」と一人の女が言った。

「涙で腫れたような目をしているわ」と他の女が言った。

「空涙ぢゃないの?」と他の一人がひやかした。

こうして、ヴィルジニアの行くところではどこでも、彼女にそれまで何のかかわりもなかったところでさえも、人びとは彼女に対して悪意を抱いているように思われた。人びとの敵意は日に日にあらわになって彼女をとまどわせ、その心を傷つけた。やがて彼女は、自分を人びとから隔離するという、本能的な防衛方法を身につけた。彼女が今の住居に引越して以来、教会でも階段の途中でも商店のなかでも、彼女に近寄り、なぐさめようとするような様子を見せる女たちがあった。しかしヴィルジニアには、そういう女たちの心のなかに悪意と皮肉がひそんでいるように思えるのだった。その性来の内気さは不信と恐怖に変わってい

た。

同じアパルトマンの共同借家人たちとのあいだでさえ、彼女の關係はたんに挨拶をかわすだけに限られていた。しかし、いつも耳をすましていることによって、彼女は人びとの動靜を心得ていた。しなければならぬことは人びとが眠っている時にした。それに、一日の大部分は、彼女はこの家で一人だったから、台所もテラスも好きなように使うことができた。

その隣室には一人の少年と母とが住んでいた。ヴィルジニアは、この母子のあいだでかわされる話を、壁越しにすっかり聞き知っていた。だから、その貧しさも、サンドリーノと呼ばれる少年の異常に激し易い性格も、この少年が布地を商なう店の店員であることもすべて知っていた。少年には会ったことがなかったが、母親とは顔みしりだった。愚痴っぽく眼差しの優しい、貧しい身なりの女だった。

「わたしもね、時とき自分がひどくひとりぼっちに思われてならないんですよ」と、この女はヴィルジニアをなぐさめ顔に言ったが、ヴィルジニアは黙っていた。「それに、家事はしなけりゃなりませんし、勤めは夜になるまで帰れません。朝はまだ日が昇らないうちに外かけるのですよ。わたしの廊下を歩く足音が聞えやしませんか」

言いまでもないことだった。ヴィルジニアの眠りはいつも浅かった。その眠りは、はるか遠くの鐘の音にも容易に破られた。

「わたしを奥さんなどと呼ばないで、ルチーアと言ってくださいよ。それに、わたしでお役に立つことがありましたら、御遠慮なくおっしゃって下さいね」サンドリーノの母親はそうも言った。

「ところで、わたしの息子は朝起きる時に少しうるさすぎはしませんかしら？ 御迷惑にはなりませんかしら？」善良な母親は、今度はそう聞いた。

うるさいといってもそれは子供のうるささではないか。

それに子供は、ヴィルジニアを怯えさせない唯一のものだった。起きるが早いから、その少年は歌をうたった。母親が出がけにゼンマイを捲いていく目覚し時計の音で少年が起き出すと、毎朝ヴィルジニアは、壁越しに少年の動靜を耳で追った。少年が起きあがり、歌をうたい、引出をかきまわし、椅子を動かし、廊下を歩きまわり、扉を鳴らし、階段を降りて行くのが、ヴィルジニアには手に取るようにわかった。サンドリーノが出かけてしまうと、彼女は午後の一時過ぎまでこの家のなかで一人だった。

他の二人の借家人はもうとっくに外かけていた。この二

人は夫婦で、窓が往来に面している部屋に住んでいた。夫は機械工で、妻はどこかの事務員だった。ヴィルジニアが引越してきて数日後の夜おそく、二人が訪ねてきて、ヴィルジニアに自己紹介をした。扉をノックする音を聞くと、ヴィルジニアは眠ったふりをしようとした。体がぶるぶる震えた。ノックがなおも続くので、出て行かないわけにはいかなかった。

「ちょっと御挨拶だけでもしておこうと思ひましてね」と若い男が言った。

その調子が浮々しているように感じられた。低い声で夫をたしなめながらも、妻の方にも何か楽しみを押えているような感じがあった。

「びっくりなさらないでくださいね。わたしたちもここに住んでおりますので。わたし、家内です」

二人を部屋に通す前に、ヴィルジニアは急いで着物を着換え、ベッドにカバーをかけ、部屋を片づけた。廊下から若い男が言った。

「そんなに急いでくださなくてもいいですよ。腰をかけて待っていますから」

しかし部屋に入ると、二人とも改まった表情になり、い分当惑しているようにさえ見えた。二人は手を取りあ

っていた。ヴィルジニアにはこの二人、特に妻の方は、信じられないほど若く見えた。男の口元には髭がなく、髪はきれいに撫でつけられていた。上半身にはスポーツシャツをつけ、下半身にはおかしいくらい短かい半ズボンをはいていたので、毛の生えた喝色のふと腿が見えていた。彼はヴィルジニアにむかつて言った。

「お近づきを願えたら、と思ひましてね。ここへ来られて一週間になります、が、部屋にばかりこもっていらっしゃるものですから……」

彼は、ヴィルジニアに許しを乞うて煙草に火をつけようとした。すると妻は、夫の手をにぎっていた自分の手を夫の腕にまわした。

ヴィルジニアは二人の視線を避けていた。何と答えていかもわからず、自分をどうにかしてしまふような恐ろしい言葉が相手の口から出るかもしれないと思うと、不安に体が震えていた。

「わたしはフアリーエロです。これが妻です」と男が言った。

「ブルーナです」と女がつくくわえた。

「姓はスズィーニといいますが、まあこれはどうでもいいことですね」

こう言つて彼は煙草に火をつけ、さらに続けた。

「実は、わたしたちが申したいのはこういうことなのです。つまり、あなたは自分が敵のなかにいるのだとお考えになつてはいけないということなのです。多分、あなたにそんなことをそのかした人もあるでしょうから、いろいろな氣にしておられると思いますが……、そんなことは決してありません」

妻は夫を制し、身を乗り出すようにして言った。

「わたしたちはただ、あなたがお一人だということだけを承知しておりますの。わたしたち、おたがい同じ家に住んでいるのですから、お友達になりたいと思います。夕方、わたしたちといっしょに台所のテーブルでお食事をなさるようにしてはどうかしら」

ヴィルジニアは腰をかけていた。息がつまりそうだった。目の前の若い女の言葉も耳に入らなかった。ファリエーロが今しがた言った言葉は、彼女の心に《鉄槌のような》打撃を残していた。そうだ、今こそ確かだった。向いの部屋に住んでいるこの二人はわたしの敵に違いない。きつと、夫を殺した一味なのだ。彼女は顔をうつむけ、膝の上に両手をおいていた。茶色の濃い毛が生えている、日焼けしたふと腿も、霧をとおしてのようにかすんでいった。やがて

ヴィルジニアは、ブルーナがコップに汲んだ水を自分にし出ししているのに氣がついた。ファリエーロはいなくなっていた。

「なんだかすっかりかきまわしてしまつて、申しわけありませんわ。わたしたち、まるで反対のことを望んできたのでしたけれど」とブルーナは言った。

ヴィルジニアは目の前の相手を見まもつた。その髪の毛は栗色で長く、うなじのあたりで結ばれたリボンでとめられていた。このために耳が見えていた。大きい黒ずんだ目は当惑の色を浮べていた。ほっそりした腕を見せ、シユミゼットのしたは胸があらわだった。一瞬、ヴィルジニアは、自分の心になぐさめをあたえてくれそうなこの若い女の両腕に顔をうずめて泣いてみたい氣がした。しかしすぐあとで、彼女は、この女がさっきファリエーロと名のつた男、バルチザンのあの男の妻なのだということを思い出した。するとヴィルジニアは、またもや恐怖のとりこになり、危険が自分につめよってくるような思ひがした。ぎごちない身ごなしで立ちあがり、口もきけないままに、目だけを相手の女から、しまったままの扉の方へうつした。

ブルーナはコップをおきながら言った。

「わたし、もう失礼いたしますわ、奥さん。でも、わたし

たちが律気な人間だということだけは、ぜひ信じていたできたいんです」

こうして六ヵ月がすぎた。酷熱の夏と雨のそば降る秋だった。初雪が降って、冷たい冬の到来が告げられた。恐ろしくもあり楽しくもある出来ごとが起こり、ヴィルジニアがこれまで知らなかった喜びをもたらしてその心を顛倒させた。しかしそれはまた、彼女のそれまでの恐怖を別の苦悩に変えた。それはまた、つきまとして離れない苦悩であった。

表面的には、彼女はそれまでと同じように、寡婦の衣服をまとい、悲しみのなかにとじこもり、孤独な生活を続けていた。しかし、たまに出あった時のたんなる挨拶の言葉にかぎられてはいたが、ヴィルジニアと他の借家人たちとの関係は、以前にくらべれば親しいものになっていた。周囲の人びとはもはや、彼女の態度や声色のなかに、不安をかくすためのあの高慢さを感じなくなっていた。今では、あの執拗なそっけなさや交際嫌いは、何か控え目で悲しげな色あいをおび、軽蔑や恐れよりもメランコリーを思わせた。鶏や室内の家具にたいしても今までのようにには注意をはらわなくなり、帽子の黒いヴェールもはや肩までは垂

れていなかった。唇には薄あかい口紅が見られるようになっていた。しかし、その目はやはりしばしば涙をたたえ、暮参の時間は長く、その回数も減らなかった。孤独な暮しぶりも依然として変らなかった。彼女が部屋から外へ出るのは、きまって家中に人氣がなくなった時だった。夕方、一ばん早く帰って来るのはブルーナだったが、その姿を見かけるとヴィルジニアは急いで部屋に引こんだ。ブルーナは廊下を通りながら挨拶の言葉をかけ、留守中に誰かが訪ねてきて言づけを残して行かなかったかとか、郵便物がこなかったかなどとたずねた。ヴィルジニアは、廊下で出あった時には、フアリエーロとも挨拶をかわすようになっていた。先に始めたのは彼らの方だった。はじめのあいだは、ヴィルジニアは、彼らと挨拶をかわすのは危険なことだと思っていたが、やがて挨拶に答えないのは失礼なことだと思ふようになった。何日かがすぎ、何ヵ月かがたつと、彼女の声も親しみをおびるようになってきた。フアリエーロがかかる時や帰った時は、踊り場での自動車の音ですぐにそれと知れた。ある時、ヴィルジニアはついうっかりと自分から先に言葉をかけた。フアリエーロは廊下に立ちどまりながらこう言った。

「やあ今晚は。ところで、一度わたしたちの部屋へ遊びに

いらっしゃいませんか」

「はあ、そのうちに」とヴィルジニアは答えた。

それは九月のことだった。いつものように、フアリエーロには、朝テラッスにいく時間がなかった。ヴィルジニアは、彼の小さいトマト畑にこっそりと水をくれてやった。彼らが口で言うように本当に自分に好意をもっているとはまだ信じなかったけれども、今ではヴィルジニアはこの二人についてほとんどすべてを知っていた。この二人がどのようにして、そしてどうして知りあったのかも知っていた。フアリエーロは、ドイツ軍に逮捕され、拷問をくわえられたが、ついに一言もしゃべらず、最後にパルチザンの仲間たちに救い出されたのだった。ブルーナは、あの眼とあの腕で、爆薬の入った買物籠をもって街中を歩きまわっていたのだ。これらのことを、ヴィルジニアは全部知っていた。部屋にとじこもったままで、ヴィルジニアはしだいに家中の秘密を知っていった。壁一枚へだてた隣室の住人ルチーアは、かつて、相手の男に妻があるとも知らずにその子を宿した女だった。その男はアビシニア戦争に出征して戦死するまで、この母子の世話を見続けた。今では、その子は十六才になり、父の名をとってアレックスサンドロという名だったが、普通に人びとはサンドリーノと呼んでいた。ヴ

イルジニアはこの少年と知りあいになった。

第二章

ヴィルジニアがサンドリーノと知りあったのは、ちょうど彼女が満三十三歳になった日のことだった。その前の夜は、さまざまの思い出が一晩中彼女を苦しめた。とりわけ、ヴィルジニアが九歳か十歳かになった時の誕生日の祝いの思い出が一ばん強烈だった。彼女はジフテリアにかかって、死ぬかもしれないと思われていた。誕生日に、父親が人形のお土産を買って帰って来て、それを彼女の枕もとにおいたが、その晩ヴィルジニアがうわごとのなかでその人形を怖がったので、あくる日人形はとりあげられてしまった。病気が快復に向った時に、人形は天蓋のついた青い揺かごのなかに寝かされてヴィルジニアに返された。

娘となり人妻となっても彼女はこの人形を手離さなかった。季節ごとに新しい着物を作ってやり、髪の色を変えて

やる習慣になっていた。何年もたつうちに、揺かごの天蓋はとれてしまった。夫はよくこう言って笑ったものだ。「ぼくらのあいだに子供が生まれたら、お前の人形は焼餅をやくだろうな」今は、この人形もなくなっていた。ヴィルジニアが、夫エツイオの葬式から帰って見ると、家中が荒らされた後だった。目ぼしい物は何もかも、人形さえも盗まれていた。隅の方に、ひっくり返った揺かごと人形の本の脚が落ちていた。あの、ジフテリアが治りかかった頃、彼女はその人形を友達に見せたくてたまらなかった。とりわけ、百姓の娘だった年上のリジーナに見せるのが楽しみだった。このリジーナも流感がもとで死んだということとを、後になって知った。

この思い出がとくにしつこくヴィルジニアの心につきまとった。彼女は、かつてと同じようにまるでふたたび熱におかされ、彼女を助けるための一杯の水もくれない敵たちにとりかこまれ、部屋のなかで一人ぼっちで死にかかってでもいえるような気持だった。水を一杯くださらない？ ああそうか。しかしこの人たちはきっと「僕は出かけなきやならないんでね」と言っ立去ってしまふ人たちだ。ヴィルジニアがやっとまどろんだと思った時に、ベルの音で眠りを破られた。壁越しに、隣室のルチーアが起きあがるら

しい気配が感じられた。つづいて、サンドリーノがその母にむかつて、眠くてたまらぬといった調子で、腹を立てた少年の野太い声でぶつぶつ言うのが聞えた。「出がけに毎朝僕を起こさなくともいいじゃないか。目覚し時計は巻いてあるんだから、店に遅れる心配なんかありませんよ」

続いて、ブルーナとフアリエーロが出かけて行った。

ヴィルジニアは鏡台の前で髪をととのえ、小さいアルコー・ランプでコーヒーを温め、部屋をかたずけた。一時間間がすぎた。壁の向う側で目覚し時計の鳴るのが聞えた。彼女は耳をすませた。サンドリーノが動きまわったり鼻歌をうたったりするのを聞くのが、彼女には楽しかった。しかし彼女は、サンドリーノと知りあいになろうとは思わなかった。この少年の生活にひそかに耳をすましていることが彼女の楽しみであった。しかし、この少年もヴィルジニアには何となく不安だった。少年のたてる物音やその声が彼女を怯えさせるようなことはなかったが、何かある種の動揺を彼女の胸にひきおこすのだった。前の週のある出来事以来、壁をへだてた部屋に一人でいる時の少年の動勢をうかがうことに、彼女は喜びと嫌悪との奇妙に混りあった思いを経験するようになっていた。

先週のある朝、隣室の目覚し時計の音を聞いたヴィルジニアは、少年が起きあがるものと思っていた。ところが、そのあとに続いたのは長い沈黙だった。彼女は壁に身を寄せた。緊張した彼女の耳に、沈黙のなかのベッドのかすかなきしみとサンドリーノの呻き声が聞え、その声はますますせわしくなり、絞めつけられるような叫びのまじった歓喜の爆発となった。少年が立ちあがり、引出しをかきまわし、廊下に出るのがわかった。ヴィルジニアは、自分でも説明のつかない不安にかられて扉にかけ寄り、イキを抜きとって鍵穴に目押しつけた。彼女は何となく、少年が誰か女といっしょに出てくるものと思っていた。やがて彼女の目に入ったのは、半靴下をはいた長い脚であり、つづいて手が見えた。指の間には火のついた煙草がはさまれていた。少年は一人だった。ヴィルジニアはなぜかほっとした気持ちになり、鏡台の前に立って微笑んだ。

その日以来、ヴィルジニアは毎朝壁越しに少年の動勢をうかがうようになった。ますます好奇心がつのり、恥らしい念はしだいに薄れていった。しかし、結果はほとんど常に失望だった。エピソードはあれ以来繰り返されなかった。一週間このかた、少年が廊下に出るとすぐ、逆らい難い力がヴィルジニアを扉の鍵穴におしやるのだった。そこに彼

女はひざまづき、手を胸にあて、息を殺した。三十三歳の誕生日を迎えた日の朝も、彼女は同じようにふるまった。

目覚し時計が鳴った。ヴィルジニアは、梳櫛を髪にさしたまま、壁ににじり寄った。三十分がすぎたが、壁の向うには何の気配も感じられなかった。もう出かけてしまったのだろうか？ しかし、それならば廊下に出た時に気づいたはずだ。おそらく今日は、あの呻き声は沈黙のなかに融けてしまったほどかすかだったのだ。刻一刻とヴィルジニアの好奇心はたかまり、心臓の動悸とともに、その興奮は制御のつかないものになった。興奮におののきながらも、彼女は頬が火のように熱くなるのを感じた。あるいは少年は病気かもしれない、誰に助けを求めることもできず一人ぼっちで氣を失っているのかもしれない。そうでなければ、たんに時計のベルの音が聞えなかっただけのことかもしれない。彼を起して店に遅刻しないようにしてやらなければならぬ。さもないと少年は店を襲になり、母親に怒りのしられることにもなりかねない。

ヴィルジニアは椅子を抱えあげ、壁の近くに落して見た。両の手を胸の上に固く組みあわせてしばらく待った。もう一度同じ動作をくりかえしたが、反応は何もない。花差しの下に敷いてある鉄の盆をとり、それを床に投げてみた。

その響きは建物全体につたわったと思われるほどだった。彼女は壁を叩く気にはなれなかった。そうすればサンドリーノは彼女に返答しなければならなくなり、用件をたずねるに違いないからだ。それでもやはり、彼女は、二、三分後には壁紙をはじめはそと、しだいに強くで指はじかすにはいられなかった。一度はじいては、反応を待つことに、その興奮はいよいよつのっていった。彼女はサンドリーノの遅刻の責任が自分にあるように思いはじめ、取返しのない結果を生むかもしれない過失を犯したような気持ちで苦しんだ。やがて、彼は気分が悪いのではないかと考え、と、それだけが唯一のありうべきことのように思われた。昨夜一晩中彼女を苦しめた懊惱がまたもや襲いかかってきた。

ジフテリアは突然におこること、自分がかつてある朝、激しい熱とひどい衰弱とで話すこともできないような状態で目を覚ましたことを、ヴィルジニアは思い出した。彼女はもはや自分のことを、自分の立場を考えなかった。彼女はただ、壁の向うに少年が一人ぼっちで息もたえだえになっているということだけを考えた。廊下に出て、サンドリーノの部屋の扉の前に立った。そこに行きつくまでの一歩一歩が彼女の確信をますます強めた。もうためらいも恐れ